

心の  
諸問題  
について

山上 頼男

*Yorio Yamagami*

文芸社

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

心の  
諸問題  
について  
に

山上 頼男

*Yorio Yamagami*

文芸社



目次

第一章 現代社会の問題点

- 一 日本のナルシシズム（自己愛主義）『人格障害の時代』岡田尊司著 8
- 二 「心の二重構造」から出てくる問題点 『講座心理療法5 心理療法と個性』 11
- 三 教育における個性化と社会化 『オレ様化する子どもたち』諏訪哲二著 14
- 四 心理療法 17
  - (1) 心理療法と物語 『講座心理療法2 心理療法と物語』 17
  - (2) イレコ構造 『これからの日本』河合隼雄著 19
- 五 ユングの共時性の法則 『講座心理療法7 心理療法と因果的思考』 22
- 六 アパシー（無気力）をどう捉えるか 『講座心理療法7 心理療法と因果的思考』 25
- 七 新たな道徳 『講座心理療法8 心理療法と現代社会』 28
- 八 自分子どもがいじめをしていたらどうするか 『現代人の倫理学』加藤尚武著 32
- 九 蔓延するミーイズム（自己中心主義）「産経新聞」平成二十年二月五日付 36

第二章 大人への道

- 一 自分らしさ 『講座心理療法2 心理療法と物語』 46
- 二 心理学と宗教 『講座心理療法3 心理療法とイメージ』 48
- 三 「大人の目」からみたハムレット 『ハムレット』シェイクスピア作 50
- 四 「無気力」について 『マズローの心理学』フランク・ゴープル著 52
- 五 ジキル博士とハイド氏 『ジキル博士とハイド氏』ステイヴンソン作 54
- 六 横並びの平等主義 『死を見つめて生きる』山折哲雄／ひろさちや著 56
- 七 「ジェラシー」と「エンビー」 『嫉妬学』和田秀樹著 59
- 八 心理的に健康な人 『マズローの心理学』フランク・ゴープル著 66
- 九 妄想について 『あなたの身近な「困った人たち」の精神分析』小此木啓吾著 70
- 十 人間失格にならないために 『自己中心が子どもを壊す』町沢静夫著 75

第三章 社会の中の個人 …………… 83

- 一 平等主義の教育について 84
- 二 恥 『恥 社会関係の精神分析』セルジュ・ティスロン著 89
- 三 攻撃心（アドラーの考え）
- 四 『自己成長の基礎知識1 深層心理学』R・フレイジャー＋J・ファデーマン編著 95  
劣等感（アドラーの個人心理学より）
- 五 『自己成長の基礎知識1 深層心理学』R・フレイジャー＋J・ファデーマン編著 97  
人生の後半期を考える
- 六 『自己成長の基礎知識1 深層心理学』R・フレイジャー＋J・ファデーマン編著 102  
人間の欲求について 『マズローの心理学』フランク・ゴープル著 105
- 七 マズローの五つの欲求段階 『新編創造力事典』高橋誠編著 109

第四章 自我の確立と母殺し …………… 117

- 一 高村光太郎と智恵子の葛藤 『絶望がやがて癒されるまで』 町沢静夫著 118  
二 シンボルの牽引力について

- 三 『自己成長の基礎知識1 深層心理学』 R・フレイジャー＋J・ファデイマン編著 127  
人格障害の両価性（アンビバレンス）について

- 四 『人格の精神分析学的研究』 フェアベーン著 134  
子どもの成長（アドラーの理論）

- 五 『自己成長の基礎知識1 深層心理学』 R・フレイジャー＋J・ファデイマン編著 147  
子どもをベット化 『ヒルガードの心理学』 リタ・L・アトキンソンほか著

- 六 反社会性人格障害 『ヒルガードの心理学』 リタ・L・アトキンソンほか著 156  
七 人生には意味がある（悩む能力をつけることだ）『フランクフルンに学ぶ』 齊藤啓一著 159

第一章 現代社会の問題点

## 一 日本のナルシシズム（自己愛主義）

『人格障害の時代』岡田尊司著（平凡社新書、二〇〇四年刊）

### 梗概

クリストファー・ラッシュの『ナルシシズムの文化』は、六十年代の政治的、社会的関心が後退し、七十年代になって、自己中心的で、自己愛的な関心を取って代わっていた状況を描出した。日本でそうした指摘を最初に行ったのは、精神分析学者の小此木啓吾であろう。現代の日本社会は、共有する価値観や公共精神の喪失により、過度に自己愛的で、ボーダーライン的となった社会に陥っている。

小此木は、国家やイデオロギーという幻想に失望しアイデンティティを失った人々が、唯一拠り所としたのが、「自己愛」であるとした。つまり政治的な理想に敗れた者たちにとって、自己愛だけが信じられるものとなったのである。

小此木が指摘した自己愛的な精神構造は、この二十年余りの間にさらに徹底したものとなっているといえる。一つは、自己愛を温存し、それを満たし続けるという方向においてであり、もう

一つは、その試みに失敗することによってである。後者によって生み出されるのが、自己否定と無力感に打ちひしがれた境界性人格障害や依存性人格障害、回避性人格障害のようなタイプである。

時代は、「自己愛の時代」から「自己愛障害の時代」へと移り変わろうとしているのである。それは、「人格障害の時代」の幕開けに他ならない。

(人格障害者の)一つの特性は極端になることで、「わがまま」や「頑固」な性格ということ、本人だけでなく周囲を巻き込みやすい。

家庭生活や社会生活を営んでいく上には、信じていい人と余り信じてはいけない人を状況に応じて見分け、相手に応じた対応をしていく必要がある。それがほどよくやりこなせて、信頼すべき相手とは信頼関係を築き、そうでない相手から、自分の身を守ることができるのである。

ところが、人格障害では、こうした「ほどよさ」が損なわれてしまうのである。

### 解説

同書の記述をもとに、人格障害者について簡単にまとめておきましょう。

あらゆる人格障害の本質は自己愛障害であると言われます。人格障害者の中でも、困難にぶつかり失敗したとき、落ち込むタイプの人は大人に近く、周囲のせいにしてたり他人を敵視または攻撃する人は、見かけは大人でも精神は未熟で、すぐ「キレル」幼い心の人と言われています。

若いときに自信過剰で自己愛性人格障害であった人も、中年以降になると自分は無価値な人間

と思う境界性人格障害に変わっていきます。人格障害者は、本人が悲哀の過程（喪の作業）を体験し、別の一個の人間の存在に共感し、つながることによって回復します。ただ、その過程に耐えられない人もあります。彼らの行動の動因は、支配感、征服感、軽蔑の感情によって特徴づけられ、社会の中で生きていくためにそれらをどう抑制するかが問題となってきました。

### 参考

一九六〇年に日米安全保障条約が改定されるにあたり、全国的規模で反対闘争が展開されました。五月から六月にかけて連日数万人がデモ行進し、国会を包囲したりしましたが、条約は改定されました。それを境に国民は社会的関心を示さなくなり、自己中心的になったと言われます。

### コメント

安保改定により日本の安全は確保されたかもしれませんが、その一方で、人々に「こころの病」がもたらされ、社会は病んでいきました。人の興味や関心が外へと向かうのを「外向型」、内へと向かうのを「内向型」と言ったりしますが、こんなに簡単に多くの人が「内向型」へと変わるものかと感心しました。

「ある個人が何らかの類型にあてはまるとしても、それをまったく変化しない固定的なものと考えないところにユングの考えの特徴がある」（河合隼雄「総論」心理療法場面における個性）『講座心理療法5 心理療法と個性』岩波書店、二〇〇一年刊）と河合隼雄は書いていますが、この解説は至当だと思いました。

## 二 「心の二重構造」から出てくる問題点

『講座心理療法5 心理療法と個性』河合隼雄総編集（岩波書店、二〇〇一年刊）

「こころの全体性と個性」豊田園子（同書所収）より

### 梗概

人は個として生まれ、固有の物語を生きる。個であることを主張しようとすれば、そこに深い孤独があることも忘れてはならないだろう。だからこそ、自分と同じように孤独な他者を思いやり、他者と繋がりを持つことが大事になる。日本人の場合、そこまで徹底した孤独というものを、実はあまり自覚していないかもしれない。人びとがこころのどこかで繋がっている感覚をまだ残しているのだろう。それが日本人独特の甘えに通じるのかもしれない。表面的には西欧の影響のもとに、今までわれわれを支えてきた地域共同体の支えや家制度を窮屈に感じてそれを壊し、個人主義を取り入れようとしながら、内面ではこれくらいは許されるであろうという甘えを残している日本人のこの二重構造は、無自覚なままに問題を引き起こすこともある。たとえば家に引きこもっている子どもに対して、親はその要求を言いなりに聞いてしまう一方で、子どもに何が起きているのか理解しようとせずに、心理的にはどこか突き放しているといった状況が起こってしまうたりする。

人は自分に返ろうとするとき、孤独はまた必要なものでもある。想像の翼を広げるためにも、創造性を培うためにも、一人になることが欠かせないと、ストーは孤独の有用性について述べている。「一人になれる」能力は幼少期に育まれなければならない非常に重要な要素であることを指摘したのはウイニコットであるが、それははじめは母親（あるいはそれに代わる養育者）が一緒にいて、しかも一人であるという体験が基礎になるという。たとえば母親と同じ部屋の中で、子どもは安心して自分の一人遊びに没頭するというような体験である。この体験が充分に持てていると、大人になってから一人でいても充足感を持てるし、たとえ大勢の中においても、一人の世界に入ることができるという。

ここで間違えないようにしないといけないのは、それは自閉とはまったく異なるということである。他者を閉め出すのではなく、しかも一人でいられるということなのだ。心理療法師の役割は、そこに存在することで、クライエントが一人になることを可能にすることだともいえる。クライエントは一人で内省し、やがて一人でいられる能力を身につけていく。しかし最近では、一般の人もこの能力を十分身につけないまま大人になってしまった人が多いのではないだろうか。いつも誰かと繋がっていないと不安に思う人が、少しの隙間の時間も携帯電話で話したり、メールを入れたりするのかもしれない。

#### コメント

戦後、わが国では、個人の利益を優先させる「個人主義」が取り入れられるようになりました。

右の論文の著者は、日本人が、表面的には西欧の影響を受け、地域共同体や家族制度は人を束縛するものだと感じて、それらを壊してきたと述べています。しかし、個人主義により個を主張すればするほど、他人と衝突したり不和に陥ったりしやすくなり、その結果かえって深い孤独が生じてくることを忘れてはなりません。日本人は、個を主張し続ける一方で、それにより生じた孤独をあまり自覚してはいません。「これくらいは許されるであろうという甘え」が心の中にしっかりとあるからです。

母子密着によって支えられる母系社会は「日本人独特の甘え」を作り出してきました。このような「心の二重構造」を持った人たちが、これまでも、無自覚なままにいろいろなトラブルを引き起こし、深い孤独に陥ってきたのです。

その反面、あまり人と衝突しない普通の人は、一人でいても孤独に感じることはありません。それは、父や母が側にいてくれるイメージが、幼い頃から脳に印刷されているからです。彼らは、無意識のうちに強い味方が側にいてくれると感じ、ずっと安心感を持ち続けています。それだけでなく、いろいろな人から見守られ、自分は愛されていると信じています。大きくなってからは、小説の中に出てくる師となるような人物が側にいてくれると思うようになり、一人で内省し、一人でいられる能力が、知らず知らずのうちに身につけてきます。彼らは、他者を閉め出すことなく一人でいられるので、「心の二重構造」をも理解でき、人とのつながりが大切であることを自覚して、人と衝突するよりもつながることの方を重視します。心の父や心の母、心の友、そして

支援してくれている心の妻や心の夫が側にいてくれれば、そんなに深刻な孤独は感じないのだと思います。

### 三 教育における個性化と社会化

『オレ様化する子どもたち』 諏訪哲二著（中公新書ラクレ、二〇〇五年刊）

#### 梗概

子ども（生徒）に合わせなければ学校は成立しない。と同時に、子ども（生徒）に完全に合わせってしまったら教育が成立しない。どちらか一方が正しいわけではないのだ。完全に学校の側に立てたり、完全に子どもの側に立てられれば、ことは簡単である。

「消費社会期」に入り一九八〇年（昭和五十五）以降の学校からは、子ども（生徒）がこれほど変容し、「オレ様化」してしまつたら、もう学校は学校たりえないという悲鳴と軋きりが聞こえてくる。教師たちはギリギリのところまで学校を支えている。

私はそうなた原因を教育レベル、学校レベルの問題としてではなく、子ども（若者）たちが学校だけで「教育」されているのではなく、すでに学校へ入る前から、そして入ってからもずっとより強力に「情報メディア」や「商品経済」や家庭から充分に「教育」されている事実に見る。自分の「個」に対するさまざまな抑圧や障害を乗り越えて、生きていく力を身につけさせるこ

ところが教育なのである。そのとき、あまりにも子どもたちの「個」のありのままを認めたり、救おうとすること自体が、逆に子どもの「個」の生命力を弱める結果になりかねない。

子どもを社会の基準に合うように「厳しく」訓練・教育しなければならぬと主張するのが保守派の人たちであり、子どもをその「個」に応じた個別性、個性に従って「のびのび」育てましようというのが進歩派である。現場にいる者の立場はその中間である。頭はどちらかの味方をしているのだが、身体性（無意識）が働いてバランスを取っている。

私は本書で展開してきたように八〇年代中葉以降、「オレ様化」した新しい人間が構成されだしたと考えている。近代の青春や反逆の時代は終わった。かつてのように、青春や反逆のあとに、おとなの世界に素直に回帰するわけではない。

私たちが八〇年代中葉に「新しい子どもたち」が登場したとき、まず家庭のしつけの問題を考えた。地域のおとなたちの持つ規制力（「象徴的な父」の一部）が喪失していることはわかっていた。学校そのものはそんなに大きく変わっていない。だとすれば、子ども（生徒）たちがおかしくなったのは、家庭の教育力の低下のせいであろうと考えたのである。

すでに七〇年代後半から生徒がトラブル（非行）を起こして家庭訪問すると、親たちに倫理性が欠如している様子がありありと見えて、「得か損か」という発想だけで生きているように見えた。

アメリカの指導的な社会学者（プラグマチスト）であるローティも「社会化が個性化の前に来

る」ことを原則として、普通教育では基礎的な知識や社会規範を身につけ、そのあとの高等教育で「個性化」をめざすべきとの二重の構造を提唱している。

ノーマルなおとなは、自分が「外部」の力によって挫折に挫折を繰り返して「現在」に到達していることを知っている。否定的な「象徴的な父」であれ、不在よりはましである。

#### コメント

小学校で個性化が推し進められると、中学生で早くも「オレ様人間」ができ上がり、その人が社会に出て行く頃には社会的不適応な人間になってしまうようです。著者は、誇大自己を持った「オレ様人間」が増えて困ったことになったのは一九八〇年代以降だと言っていますが、小・中学校では、個性化の教育より、まず社会化の教育がなされるべきだという意見が多いのも、そのような現実があったからなのでしょう。

一般に、社会化の教育においては、一定の枠組みや意見の共有された状況が生まれるため、野放しになった欲望でもコントロールの容易なことが臨床経験上確認されています。このことはたいへん参考になるものと思います。

## 四 心理療法

### (1) 心理療法と物語

『講座心理療法2 心理療法と物語』河合隼雄総編集（岩波書店、二〇〇一年刊）

〔総論〕『物語る』ことの意義」河合隼雄（同書所収）より

#### 梗概

心理療法を受けるために来談する人は、何らかの意味で、その意識の主体性や総合性をおびやかされている人と言っているまいだろう。したがって、その意識の在り方を改変してゆくことが必要になるが、そのためには、その人の意識と無意識の関係をよく知り、また、それを調整してゆくことをしなくてはならない。したがって、心理療法家は、その人の無意識の声に耳を傾けることが必要になるのだが、それが深い層との関連になるほど、「物語」の形をとってくると思われる。もっとも、この考えについては、後に述べるように、相当に慎重な検討が必要となってくるが。

『モノ』の語りとしての妄想と物語り」川戸圓（同書所収）より

ある「物語」を語り継ぐことは、私たちにとって欠かせないことであると思われる。さて定型

の一つは、こちらの世界から異界へ行き、こちらの世界へと帰還するもので、もう一つは、異界からこちらの世界へ来て、異界へと戻るものである。

こういった作用に、心の病を癒す力を読み取っていったのが、ユングである。ユングによれば、夢とか、妄想・幻聴というような症状とか、神憑りかみがみ・狐憑きといった憑依現象等々がある。

ただユングも触れていることだが、前者にも後者にも、常に危険が隣り合わせであることを忘れてはならない。その危険とは、前者の場合には、異界訪問をしたままでこちらに戻れないこと、たとえ戻ったとしても以前のように意識界に適応できないことであり、後者の場合には、意識界が無意識界に侵食されたままになる、ということである。「物語」にも、たとえば、主人公は向こうへ出かけて二度と戻ってきませんでした、という終わり方をするもの、あるいは、大洪水に襲われてすべて失われてしまいました、という終結を迎えるものなどが、時にはあることから見て、それはおわかりいただけるだろう。

### 「聖娼の物語と心の癒しについて」高石恭子（同書所収）より

「いま、……社会学は物語ストーリーを得ることに夢中である」という状況が現れている。現代人がどのような物語を語り、語られた物語が社会でどのような役割を果たし、さらに社会的、政治的に力を得た物語が現代人にどのような影響を及ぼしているか、という相互作用にある。この新しい思考の枠組みは、次に述べる二つの心理学の領域にも取り入れられてきている。

その一つは、ナラティブ・セラピーと呼ばれる家族療法一派である。

もう一つは、ライフ・ストーリー（人生の物語）研究と呼ばれる、発達心理学から派生した新しい分野である。発達心理学もまた、ここ五十年ほどの急激な人間の長寿、高齢化により、成長期の発達を論理実証主義的に研究するだけでは、現実の長い人生に貢献することができなくなった。成人して以降の、平均で約六十年という長い年月を支えてくれる説明原理を求められるようになったのである。

## (2) イレコ構造

『これからの日本』河合隼雄著（潮出版社、一九九九年刊）

### 梗概

遠藤さん（遠藤周作：引用者注）がよく言われるのにイレコ構造ということがあります。その典型的なのは『侍』がそうです。支倉常長は何かこの世の王に会おうと思ってるぐるぐるやってるうちに、知らん間にその王様とは次元の違う王、つまりキリストを知ることになるんです。こういうイレコ構造になってる。こういうことを自分はやってきたと言われるのですね。

私もまたすぐに応じまして、いやそれは私の仕事と非常によく似てると。私がやってるのはどういうことかと言うと、私の所へ来られる人は、例えば札付きの非行少年とかいう名前が付いて

るわけですね。そういう人が来られて、その人と一緒にぐりぐり回ってたら、ちゃんと違うのに変わってしまうのですね。次元の違う人に、その人が変わってしまうのです。ただしその間、だいぶ長い間に一緒にぐりぐり旅をしなくちゃなりませんけども、苦勞を共にするけども、苦勞を共にしている間に正にイレコ構造で、変わっていつてしまう。ずうっと付き合っていると、抱きかかえていると、どこかで変わっていくというこの体験をする。で、イヤー似たようなことを二人でやってますねという話をしてたんです。

いろんな人が来られていろんな人の話されることとされることというのは、本当にその人もコントロールが出来ない、もの凄い強烈な力、そしてそれは恐ろしいものでありながら、やはり魅力を用意しているというそういうものですね。自分も共に体験していかなかったら、絶対に出来ませんで、体験しつつ見るということが大事なんです、そういうことが宗教ではないかと。それをフィクションという形で他人に伝えることをしてる人たちが作家の人たちですね。

生きてることが作品であるし、私の所へ来られた人が自分で自分という作品を作っているのを助けているんだなというような考え方で話をしてました。

#### コメント

心理療法師の仕事のほとんどは、私たち人間がはまりやすい誇大グセの状態から患者を脱出させ、現実検討ができるようにしていくことだと言われています。誇大グセにはまった本人や周囲は、この問題で非常に苦しんでいます。そこで、心理療法師は「入れ子」の仕事をして、彼らを

問題解決へと向かわせませす。大きい器を次第に小さい現実の器にしていく作業をするのですが、河合隼雄先生はこのことを「ぐりぐりぐりぐり回ってたら、ちゃんと違うのに変わってしまう」と表現されています。

また、人格障害者である境界例の核心（孤独）に対する治療は、第一期から第三期までの時期に分けられています。若い頃は誇大グセで勢いもよく、元気だった人が、やがて中年に入ってくると、次第に心の中で孤独という問題に直面してきます。つまり、人とのつながりをうまく作れるかどうか、あるいは一人でいられる能力があるのかないのかという問題が出てくるようになるのです。ほとんどの人は、自分でいろいろと考え、工夫されているようですが、心理療家の手助けが必要になる場合もあります。その場合には、患者が一人でいられるような指導がなされます（参考文献：成田善弘編集『人格障害』「現代のエスプリ」別冊、至文堂、一九九七年刊）。

人間は誇大グセになったり、誇大グセゆえに人と衝突して孤独に落ち込んだりするドラマを繰り返しているようです。

## 五 ユングの共時性の法則

『講座心理療法7 心理療法と因果的思考』河合隼雄総編集（岩波書店、二〇〇一年刊）  
「〔総論〕心の現象と因果律」河合隼雄（同書所収）より

### 梗概

因果的思考のみでは、人間に関する事象を把握することができない、と考えたのが、C・G・ユングである。ユングは決して因果的思考を放棄したり、拒否したりしてはいるのではなく、因果の法則のみならず、共時性（synchronicity）の法則ということも考えざるを得ないと主張しているのである。

心理療法をしていると、思いがけなく偶然の出来事が生じ、それが心理療法の展開に深い意味を持つことがある。因果的には説明できない。しかし、だからと言ってそれを偶然として無視するのはおかしい。したがって、そこには因果律とは異なる共時性の原理がはたらいているのではないか、というのがユングの考えである。

共時性の原理を認めることは、「実際の価値」を持つ。なぜなら、それは、クライエントの語りや行動をすべて因果的に理解しようとする治療者の態度に次元の異なる自由度を与えるからである。「心理学好き」の治療者は、クライエントのあらゆることを彼の好きな心理学によって、

すべて理解してしまう。これは恐ろしいことである。これは次のステップとして何らかの「操作」につながってくる。それは下手をすると、クライアントのたましいへの侵入になる。共時性の原理を認めることによって、治療者のクライアントに対する「操作」や「介入」に相当な配慮が生じる。

治療者はすでに述べた「操作放棄」「説明放棄」の状態になることによって、他に比して、共時的現象のよく起きる治療によって成功することが多くなる、という「法則」が立てられる。というより「法則」など不用と言うべきか。

因果的思考を放棄してクライアントに会っているとき、クライアントの家族や、その教師、時には医者や裁判官などの他の専門職の人に、クライアントをどう理解して、どのように会っているのかを説明する必要があるときがある。そんなとき、自分は「因果的思考を放棄して、ただ会っているだけ」などという説明が通用しないことの方が多い（ごく稀に通用することはある）。そして、これらの人との関係を維持することが、心理療法を続行してゆくために必要なときがあるが、そのとき、その必要に応じて、相手を納得させる説明ができることが治療者の役割のひとつである。つまり、その説明は多くの場合、因果的な説明になるが、それは納得のための方便として用いられている。

何と言っても、納得ということが大切なのである。もちろん、非因果的な現象の把握が重要なことを納得させる道もあることを忘れてはならない。

## コメント

人間の意識構造は因果関係をもとにつくられていると言つてよいでしょう。心の病に関して、この因果関係に基づく説明が相手を納得させるために大きな効果を発揮します。たとえばフロイトの精神分析では、父母から与えられた幼児期体験が原因となって人間の心のあり方が規定されるといった具合に、因果的な説明がなされています。

これに対してユングは、決して因果的思考を拒否したり、放棄したりはしないものの、それだけでは不十分であると主張しました。心理療法中、思いがけない偶然の出来事が生じ、それが心理療法の展開に深い意味を持つことがあると、彼は言います。これが共時性の法則で、単純に二点間を結ぶ因果的な考え方による直線的な思考の「論理」よりも、問題を面もしくは三次元として捉え、人間の持つイメージの豊かさを引き出すやり方の方が治療に役立つことが多いと言っています。

共時性の法則について、もう少し説明しておきましょう。たとえば、ある患者がAの状態であるならば答えは迷わずBだと考えられるような場合でも、治療者は、共時性のことを考慮に入れて、「Bになるとは限りません」と発想します。そして、患者に対して「分からんですね」と答え、患者とともに分からん状態を続けていくことになりました。これは、患者を尊重し、患者を無視していないということであり、よけいな「操作」や「介入」、さらには「たましい」への侵入を防ぐことにつながります。このような方法が心の病を解決に導くことがあるというのが、共

時性の原則の考え方です。

こうした条件の下に置かれた患者は、本来的な生きる姿と自由とを取り戻し、ますます共時的現象がよく起こるようになります。心理療法家にとっては、非因果的アプローチで患者と関わりを持つことが最も大切ですが、それは修練を積み重ねれば可能であると言われています。

また、これと似た現象に、人と人が人間関係で結びつく、それぞれがもとそうであったのとは違った新たな人間に変化するということがあります。これを変容といっています。この変容もまた、何の因果関係もない出来事であり、そんなこともありえるとしか言いようのない偶然の現象なのです。

## 六 アパシー（無気力）をどう捉えるか

『講座心理療法7 心理療法と因果的思考』河合隼雄総編集（岩波書店、二〇〇一年刊）  
「〔対談〕因果的思考を超えて」長谷川眞理子＋河合隼雄（同書所収）より

\*以下、引用は全て河合の発言

### 梗概

要するに今の世界は、何をしたかとか、何を儲けたかとか、何をやったかというふうには、価値観がすごく偏っているでしょう。そうすると、そこに本質的にぶつかった人はアパシーになりま

す。学生などにはそういうのが多いわけです。彼らは死ぬことさえも面倒くさいのですね。

言えは言うほどだめです。「しようがない」とか「べつに」とか……。これは今の世の中の趨勢の陰の部分若者が背負わねばならないから、十人に一人ぐらいいはいても仕方がないのじゃないでしょうか。

(治療の) 下手な人は、アパシーになった原因は何かと考えるんです。それで、「君のお父さんはどんなお父さんか」とか、「お母さんは？」と聞いてみたりする。答えはみんな「べつに」ばかりです。それだったらまだいいほうで、「お父さんは？」「あ、良いです」「お母さんは？」「ふつうです」——ふつうか良いか。といって、そのときにまた下手に、社会が原因だという言い方もわたしはあまり好きじゃないんです。

アパシーの人というのは人間の距離にもすごく敏感ですから、ある一定以上に入り込んだら絶対だめなのです。自分の世界に入られるのをいちばん嫌うので、普段は「べつに、べつに」と言って自分を守っているわけです。

一般には早く原因を見つけて、それを除去すれば治るだろうと思うけれども、そうでなくて、その人の全体状況をいかに把握するかこそがわたしたちの仕事ではないかと考えているんです。

「放っておいてくれ」とか、「俺は自分でやる」とか、「もう死ぬのだ」とか、そういうことを言う人は大勢いますが、しかしそれはそういう言語表現を今しておられるというだけですね。もし本質的に治る気のない人がおられると、それは大変ですね。大体われわれのところに来る人は、

治るとか治すとかいうよりは、自分が正しくて、世界中が間違っていると確信している人が多いわけで、なんとかして世界を変えようとしておられるのだけれど、変わらないうちに自分が変わっていくのです。それが非常にきつい人はもちろんものすごく難しいです。何をする気もない方の場合など……。

何かが動き出すんです。ただその動き方がいろいろで、それこそ個体差があるんですね。大体はほんとはつまらんことなんだけれども、つまらんことにその人が関心を持ちだすと、もう話は始まるわけで、そこからだんだん広がっていくのです。ただ、そのときに下手な人は、そういう子どもには何を勧めたらいいかと、すぐにそういうふうを考えるんです。

待っていると動き出して、しかもその動きをわたしたちが読めるとすごく面白いんです。逆になかなか読めない場合はずっと待っていないと仕方がない。

#### コメント

患者は、こちらが待っていると動きやすいようで、反対に何かを勧めると動きにくいようです。共時性の原理で考えてみましょう。心理療法の現場で、学生の無気力の状態をAとすると、たいていの人は、因果的思考によって、迷うことなく、適切な話題はBだと答えを出します。ところが、これでは共時性現象が起りにくく、解決の道が遠くなってしまうです。むしろ、大切なのは、Bの話をしていては解決しないと判断することです。Bとは、具体的には掃除、運動、クラブ活動、ボランティア、父母との関係、学校や仕事のこと、社会問題などですが、治療者は、

それらを話題に出すのではなく、「Bになるとは限りません」と考えて、「まあまあですか」「ふつうですか」「別に。そうですか」と、患者の言うことを繰り返すようにつぶやきながら、ひたすら待ちます。待つだけです。そうして、患者が変わってくる 때가治りの始まりです。

## 七 新たな道徳

『講座心理療法 8 心理療法と現代社会』河合隼雄総編集（岩波書店、二〇〇一年刊）  
「心理療法と道徳教育」皆藤章（同書所収）より

### 梗概

従来の道徳教育は、「善」の奨励、言い換えれば悪の否定・排除をその目標として実践されてきたように思われる。けれども、ある行為を悪として単純に否定・排除するかぎりにおいては、それはモデリングの域を出ない。それでは、人間が生きる知恵を個々が見出していくことにはならない。悪を否定し排除するところに「個性化」はない。「個性は悪の形をもって顕現してくる」と河合隼雄が指摘するように、個性化プロセスに悪の体験は必然である。

このようにみると、「悪」について、やはりある程度の議論は必要であろう。

それでは、この少女がそうしたプロセスを生きるには、その行為を否定するだけではなく、一体何が彼女に必要なのだろうか。それは、この少女がみずからの行為を「悪と知る」ことである。

# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

山上 頼男 (やまがみ よりお)

1939年、京都府出身  
金沢大学医学部卒業  
京都府在住

## 心の諸問題について

---

2009年12月15日 電子出版発行

著 者 山上 頼男  
発 行 者 瓜谷 綱延  
発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1  
電話 03-5369-3060 (編集)  
03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Yorio Yamagami 2009 Corded in Japan

ISBN978-4-286-07555-6

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」  
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。)

新 09.12.07 M.S.